教授の呟き

第16回

刷り込み現象は、払拭できるか

東京海洋大学教授　苦瀬博仁

危険な刷り込みや思い込み

先日、理論経済学者たちと話す機会があったので、思い切って「経済分野で、物流やロジスティクスの研究が少ないのは、なぜでしょうか」と聞いてみた。すると一人は「空間の概念が希薄だからだろう」と答え、もう一人は「在庫問題の経済学的な解釈が難しいからではないか。若い時から［理論経済学はかくあるべし］と学んでくると、その体系になじまない問題は避けがちになる」との話だった。

マーケティング学者からも、「物流やロジスティクスにはマーケティングの範疇（はんちゅう）を超えた部分もあるが、つい教科書通りに物流をマーケティングの一部と考えてしまう」と聞いたことがある。

誤解を恐れず大胆に言えば、伝統的な学問体系の枠組みで丁寧に学べば学ぶほど「刷り込み現象」（注）が強烈となって、専門特化という名の「思い込み」が激しくなりかねない。学際領域にあるため、多様な視点が求められるロジスティクスという学問分野でさえ、「刷り込み」や「思い込み」は、しばしば見かける現象である。

業界の個性と社員教育

このような現象は、なにも学界だけでなく企業社会にもありそうだ。ロジスティクスの世界でも、荷主と物流専業者では意識の違いも明確である。荷主であっても製造業と卸小売業で異なる。さらには、同一業界でも社風や言葉遣いが異なることもある。

しかし、学界でも企業社会でも、長い間同じ世界にいると「自らの方言こそが標準語、自らの思考方法こそが標準的」と思い込みがちである。成功体験に裏打ちされた自信とともに、社員教育という名の刷り込みもあるのかもしれない。

社会と結ぶ大学教育を

大学では個性豊かな内容を目指して、早くから専門教育を行いたい。しかし、ゆとり教育が原因かどうか分からないが、学生の基礎学力や判断力が低下しているといわれている。そのため早期の専門教育を行うことで刷り込み現象を引き起こし、柔軟性に欠ける学生を育ててしまうかもしれない。

これを避けるためには、基礎科目や教養科目の充実とともに、専門教育の重点を大学院に移すことも一つの方法である。

考えてみると、約30年前の大学進学率は同世代の20%程度だったが、現在は40.5%（2002年）である。理工系に限れば半数以上が大学院に進学する大学も多いから、比率だけなら昔の大卒が現在の修士卒に相当する。確かに、大学院の修士課程の2年間は、学生を大きく成長させる。

ロジスティクスは応用学問である

がゆえに、理論と実践の役割分担を考慮しながら、大学は社会との連携をより強化すべきだろう。

教育面では、大学生が企業で研修するインターンシップ制度などがある。企業が学生の専門知識レベルを測ることもできるし、学生もロジスティクスの実務の一端を実感できる。

さらには、社会人大学院などで、積極的に門戸を開く必要がある。研究面では、共同研究などを通じて、社会との連携を図りたい。

教育はバランスが難しい

社会が大学の教育に期待するものは、「広く浅い知識」なのだろうか、それとも「狭く深い知識」なのだろうか。研究に期待するものは、「理論の構築」なのだろうか、それとも「実践との融合」なのだろうか。教育でも研究でも、バランスを取ることは難しい。

このような悩みを抱えながら、また今年も4月が来てしまった。国立大学も経営マインドを求められて、独立法人化された。東京海洋大学海洋工学部の流通情報工学科は、旧東京商船大学の伝統を受け継いでいるものの、船舶実習はなく、修士・博士課程もあり、女子学生や社会人大学院生も多い。社会からの理解も得られ、おかげさまで就職も好調である。

個性を輝かせるために、刷り込み現象の不安を持ちながらも、1年生から専門教育に取り組み「ロジスティクス概論」を講義することになる。学生にとっても社会にとっても、良い結果をもたらすと信じたい。

しかし、その答えが出るのは遠い先のことなのである。

ロジスティクス教育でのトレードオフ

適応性と多様性の醸成	VS	個性と専門性の涵養
（柔軟性の確保） （没個性化の不安）		（個性の確保） （刷り込み現象の不安）
基礎教養教育の充実	⟷	早期の専門教育の実施
広く浅い知識	⟷	狭く深い知識
実践との融合	⟷	理論の構築
社会との連携	⟷	大学院での専門深化

（注）刷り込み現象：出生後のある限られた時期にある事象がインプットされると、その後変化することがないという現象

Profile

東京海洋大学　海洋工学部
流通情報工学科　教授
苦瀬博仁

（くぜ　ひろひと）1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授、副学部長。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授を務める。主な著書に『付加価値創造のロジスティクス』（税務経理協会）、『都市交通―都市交通計画・都市物流計画』（丸善）、『マニラ・エンジョイ・トラブル』（論創社）、『明日の都市交通政策』（成文堂）